

奨学金制度を効果的に活用するために

「阿部映子エスペランチスト学生・院生等奨学金」の運用と北海道の青年運動

北海道エスペラント連盟 副委員長・組織部長 宮沢直人

前史

エスペラント運動を発展させるため多くのエスペランチストが様々な活動を行っている。北海道連盟で青年を組織する活動は、北海道大学エスペラント研究会の学習会活動のような若者のサークル活動が基礎となる。

しかし、ルーティン化した活動からはなれて、面白い活動を行うには、すなわち、人、企画力、資金が必要となる。北大エスペラント研究会主催の 2016 年 8 日間にわたるエスペラント宣伝サハリン遠征は多くの成果をあげたが、企画は宮沢がほとんど行い学生たちは消費者としての参加という面が少なくなかった。北海道連盟は資産があるのにも関わらず、予算に組み込まれていないことを理由に資金援助をことわった。またある同志は、連盟は北海道にエスペラントを宣伝するのが活動目的でありサハリンにではないと主張した。結局、連盟委員の決して少なくはないが個人的寄付にとどまった。資金はエスペラント界初のクラウドファンディングも活用した。しかし、この資金調達もエスペランチスト以外からの寄付はほとんどなかった。膨れ上がった参加者数と学生の参加費 1 万円という設定によって、大きな赤字となり、宮沢が 100 万円以上を負担した。単純に経費を参加者数で割ると 16 万円になった。この遠征後、学生の中に再度の遠征を求める声があったが、経費削減と資金調達をともなうサハリン遠征企画はなかった。

2018 年日韓の経済戦争がおこり、両国の民衆に相互の反感がひろがった。この時、北海道自由エスペラント協会は「いま、エスペラントで日韓の民衆が交流しなくて、いつエスペラントを使うのか」と主張し、韓国エスペラント大会への参加を訴えた。このとき、幾人かの学生に渡航費の援助を行い、ある者は一からエスペラントを学んで韓国大会に臨んだ。

少子高齢化といっても都市部には多くの若者がいる。企画力は感性が大切で、しかも経験を積まなければならない。ひとつひとつの企画を大切に、できるだけつぶさずに育てるようにしなければならない。資金はここぞというときに使うことが大切で、大胆に寄付を集めることも必要だ。

阿部映子同志の奨学金構想

末期がんの宣告を受けた阿部映子同志は、北海道連盟の会計委員を長らく務めてきた。彼女は北海道連盟委員の高齢化、特に事務局長を引き受けることができる者がいないことに心を痛めていた。そこで、彼女は奨学金制度の設置を企画した。それは、北大エスペラント研究

会のメンバーに事務局長を依頼し、引き受けたものに奨学金として 20 万円を支給する。そして、北海道連盟に奨学金の運営をまかせるというものだった。彼女は、しばしば若者とエスペラント運動を行ってきた宮沢に、この奨学金構想を相談した。

宮沢は以下のように、奨学金構想を変更するように提案した。北大エスペラント研究会は外側から見るほど安定してはおらず、対象を一般的に公立・私立を問わず学生・院生などまで拡大するべきである。事務局長に立候補するのが条件になるが、20 万円はインセンティブとしては中途半端である。多くの学生は学費納入が困難なのであるから、最高で、国立大学の年学費(535,800 円)を無償支給することができるようにするべきである。運用主体として北海道連盟は、学生の置かれている状態や要求を必ずしも把握しているわけではなく、支給の判断を適切に行えるとは限らない。連盟執行部は巨額な予算執行の経験をほとんど持っておらず、奨学金支給の決断が困難である。また、柔軟な運営は極めて難しい。

阿部同志は、宮沢の指摘を採用して、「阿部映子エスペランティスト学生・院生等奨学金」を制定した。運用主体は北海道連盟の外に置き、阿部映子(出資者)、横山裕之(連盟委員長)、宮沢直人(青年組織者)よりなる奨学金委員会である。彼女は資金を積み増し、最低 10 年間は奨学金制度を持続できるようにした。

奨学金制度の柔軟な運用

阿部映子同志の没後、今日までに奨学金被支給者及び支給予定者は 4 名になる。支給は一年に一名と規定されているが、奨学金委員会は学生の学費支払いの困窮の度合いとエスペラント学習・活動意欲を考慮して、年に複数人にも奨学金を支給している。また、「学生・院生など」は通信制学校の受講者も対象としている。つまり、沼津エスペラント会通信講座の受講者も対象者となりうるわけで、制度は必ずしも青年のみを対象とするものではない。また、複数の受給者の存在からは、受給者が必ずしも事務局長でなくても連盟委員として任務を引き受けるとしても良いこととした。

若ければみずみずしい感性で、さまざまな活動を企画することができるとは限らない。今の学生には保守的な社会情勢や学生をお客様としてあつかう教育方針などにより、高齢者がイメージする学生像とはかけ離れた実態がある。いままでに学生たちが考えた企画には、資金調達をまったく考慮していないものであったり、逆にエスペラントで利益をあげて起業活動を行いたいというものもあった。好い企画があれば、北海道エスペラント連盟という組織を説得できる企画書の書き方、公的助成金の申請の仕方、予算と資金調達の方法などを助言しなければならぬ。若い連盟員は組織運営の要点、企画の立て方、資金の調達法などを、エスペラントの学習と共に身につけることになる。

若い連盟員をルーティン化した活動にのみ投入すれば、奨学金制度があっても多くが消耗し、運動を離れていく。北海道連盟は、さまざまな企画に充てることができる、もう一つの財源を準備した。これまでの活動で節約して(まともな活動をする事なく・宮沢)備蓄した財源

と、奨学金原資とは別に阿部映子同志が寄付した資金が北海道連盟にはあった。これは近年恒常的な赤字財政となっている毎年の北海道エスペラント大会のために使われることが想定されていた。2020年11月23日連盟総会は、思い切って毎年の北海道大会をとりやめ、大会をやりたいという連盟員がいて、大会開催を行える能力のある連盟員が存在する時にのみ大会を開催することとした。大会のための財源を北海道エスペラント運動発展基金とし、大会、地域オルグ、他大会・行事への連盟員の派遣、エスペランチストの招待、エスペラント集会・講演会の開催などの幅広い用途で財源を使えるようにした。運動発展基金を財源として、年20万円を予備費として計上して、連盟員が一人も反対しないことを条件に、この予備費を各種企画に使用できるようにした。ここに人、企画力、資金の三点がそろうことになった。

地理的孤立を克服する闘い

北海道連盟は今総会で、青年部を組織した。青年部の任務は地理的孤立を克服して、ロシア極東サハリン州や韓国・アジアそして日本列島の青年たちと交流し、道内各地にエスペラントと国際交流のネットワークを作ることである。そして、先住民族や在日韓国・朝鮮人、技能実習生という名の外国人低賃金労働者たちとの交流も可能な限り追求する。海外連盟員は会費無料でネット媒体の連盟機関誌を受け取ることができる。また、海外からの記事の投稿が推奨されている。日本青年エスペラント連絡会に必要な援助を行えるようにする。

2021年4月、北海道のどこかの高校に国語教師として赴任する同志がいる。赴任先でできるだけ支援と交流を行う。沖縄の若い同志は「北琉交換留学生」構想に強い関心を持っている。サハリンには現状では遠征団を送ることはできないが、現地大学が開講していて学生と対話ができる時期に、連絡員を派遣することは考えるべきである。アジアの青年エスペランチストの年一回の交流会である Komuna Seminario に対する参加を考え、場合によっては主催できる力量をつけることも努力目標とする。